調査研究「『書くこと』を中心にした言語活動」
－中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善－

実践編　事例②　短作文（200字・400字）

長崎県教育センター　高校教育研修課
指導主事　畑野公昭

Ⅰ　はじめに

「書くこと」の指導は、新学習指導要領において「言語活動」の重視が打ち出されたことで、その重要性がますます高まっている。しかし、教室では、計画的・組織的な実践の在り方や具体的な指導方法についての明確な指標を持たないまま、それぞれの教員が手探りで「書くこと」の指導に取り組んでいるケースも多い。特に、日常の学習活動における作文の指導は、単発的・限定的な取組に止まりがちである。

そこで、本教育センターでは、新学習指導要領の内容を踏まえつつ、平成２２年度から２年間にわたって「『書くこと』を中心とした言語活動」についての「調査研究」に取り組み、その中で日常の学習活動で活用できる事例として「２００字作文」を取り上げた。平成２２年度は、理論の構築と実践例の収集を行い、既に本教育センターのホームページで公開しているので、参照していただきたい。本年度は新たな実践例の収集と検証に取り組んだ。以下に紹介する実践例は「２００字」と同時に「４００字」の作文にも取り組んでいるので、「短作文」の取組として紹介する。

Ⅱ　実践例（「自ら考える力」を高める短作文）

１　実践校及び実践報告者

長崎県立長崎西高等学校　　松尾　恵子　教諭

２　実践の内容

教科書教材の単元ごとに、授業で学習した教材に関する感想を基本とした２００字～４００字の短作文を課し、優れた作品を集めた生徒作品集「蒼穹」を年度末に発行する。
（生徒作品集「蒼穹」は1981年（昭和56年）３月に創刊され、毎年１回発行されている。）

・実施時期	平成２３年４月～平成２４年２月
・実施学級・生徒数	１年１組～８組（普通科）　計３２０名
・使用教科書	「国語総合」現代文編（大修館書店）
・実施回数	９回

３　指導上のポイント

① 昨年度の生徒作品集を配付し、到達目標を知らせる。
② 短作文を教材の読解・授業の理解を深めるための表現活動と位置づけ、授業終了後の課題として取り組ませる。
③ 小説教材と筆者の主張を自分自身の体験に基づいて考えさせる課題の場合は４００字とする。
④ 書いた内容にふさわしい題を付けさせる。
⑤ 学年の教科担当者が統一して行う。

４　取り上げた教材と設問

以下は「国語総合」現代文編（大修館書店）に収録してある作品である。字数は「３　指導上のポイント③」により、下記①～⑤及び⑧が４００字、⑥⑦⑨が２００字と設定してある。

①「水の東西」山崎正和

設問：「日本と西洋の文化の違いについて考えたことや、日本人の感覚・感性について考えたことを、具体例を挙げながら自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

②「美しさの発見」高階秀爾

設問：「あなたにとっての『美しさ』『美しいもの』とはどのようなものだと考えるか、自分の体験を踏まえながら自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

③「羅生門」芥川龍之介

設問：「主題（テーマ）を踏まえて、自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

④「メディアとしての顔」原島　博

設問：「『今まで気がついていなかった〈もうひとりの自分〉をそこに発見する』について、自分の体験を踏まえながら自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

⑤「『しきり』の文化論」柏木　博

設問：「『〈わたしたちのもの〉というしきりが、私と他者との差異や境界あるいは壁をプリミティブなかたちで認識させている』とはどういうことか。自分の体験を踏まえながら自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

⑥「自然と人間の関係をとおして考える」内山　節

設問：「筆者の主張をもとに、『自然と人間の関係』について考えたことを、自由に題を設定して２００字以内で作文せよ。」

⑦「知識の扉―学ぶことの身体性」港　千尋

設問：「筆者の考えを踏まえ、あなたが考える『情報化社会』における問題点を、自由に題を設定して２００字以内で作文せよ。」

⑧「高瀬舟」森　鴎外

設問：「主題（テーマ）を踏まえて、自由に題を設定して４００字以内で作文せよ。」

⑨「ゆらぐ科学のリアリティー」黒崎政男

設問：「主題（テーマ）を踏まえて、あなたが考える『科学』における問題点を、自由に題を設定して２００字以内で作文せよ。」

５　生徒アンケートの結果（調査生徒数１年生：315名）

①　「作文」を行うことによる「書くこと」への意識の変化について

ア　高まった	３３％
イ　かわらない	６６％
ウ　低くなった	１％

②　「作文」は「書く力」を高める上で役に立ったか	
ア　役に立った	２１％
イ　ある程度役に立った	６５％
ウ　あまり役に立たなかった	１２％
エ　役に立たなかった	２％

③　「作文」に取り組むことによる効果について（複数回答可）	
ア　文章を「書くこと」への抵抗感が減ってきた	３６％
イ　文章の「書き方」が分かってきた	２７％
ウ　文章を書く「内容」が充実してきた	１８％
エ　テキスト本文を「要約」する力がついてきた	２０％
オ　書く内容について、自分なりに「考える力」がついてきた	７０％
カ　書く上での「ことばの使い方」が充実してきた	２０％
キ　書く上での「文章の組み立て（論理性）」を意識するようになった	３７％
ク　書くことで、テキスト本文の「内容の理解」が深まった	４０％

④　生徒の主な感想（記述式）

・最初より短時間で書けるようになった（多数）
・作文を書くことで本文を何度も読み直すので、理解が深まってよかった（多数）
・自分の考えをまとめる機会ができた
・自分の言いたいことを要約する上でよい刺激となった
・要約したり、まとめたりするのはうまくなった
・講話の後の感想が書きやすくなった
・作文は大変だけど、自分の思っていることを限られた字数で書くことがおもしろく、また力になった
・短い中にまとめるのはなかなか難しいけど、長くない分やる気が出る
・書く事への意欲の向上があったのはよかったが、自分の書き方の改善点などがわからないので、できれば添削をして欲しい（多数）
・作文の書き方をもっと習いたい

６　「短作文」の取組に対する松尾教諭の分析

①　**教材の読解・授業の理解を深める**ための作文課題としては一定の効果があった。
②　生徒の**書く意欲を引き出す**機会となった。
③　生徒への還元方法として、生徒同士の回し読みと評価は、生徒も意欲的に取り組み、一定の効果があった。
④　事後指導と評価については課題が残った。
⑤　まずは、筆者の主張をもとにして自分の意見を書くという条件を確認させ、その上で、材料集め、主題、構成を考えるためのメモの作り方を、もう少し丁寧に指導する必要がある。

７　生徒の作品例（２００字分）

「自然と人間の関係をとおして考える」　内山　節（『新環境学がわかる。』朝日新聞社　1999）

設問：筆者の主張をもとに、「自然と人間の関係」について考えたことを、自由に題を設定して 200 字以内で作文せよ。

科学と自然　　１年女子

自然と人間は近代以前では共に生きてきた。しかし、近代に入り、科学が進歩するにつれて、人間は自然を支配する形で扱い、たとえ自然がなくなろうとも科学の力でどうにでもなると思ってきた。それがどうにもならないとわかった今、私たちは自然に合わせ、科学の進歩を自然のために利用するべきだと考える。人間は自然なしでは生きられない。そして自然がなくなってからでは、科学の力は役に立たないのだ。

「知識の扉―学ぶことの身体性」　港　千尋　（『第三の眼』廣済堂出版　2001）

設問：筆者の考えを踏まえ、あなたが考える「情報化社会」の問題点を、自由に題を設定して 200 字以内で作文せよ。

なにも親指だけではない　　１年男子

溢れんばかりの思いを古人は歌に託す。現代人はメールに託す。もちろんどちらも言葉である。しかし、同じ言葉でも重みが違うように感じられるのは私だけだろうか。それは何も、その直後のことだけではない。幾年過ぎた後、読み返すとする。大事に箱に鍵をかけて保管しておくこととメールに鍵マークをつけて保存しておくことでは、同じようだが、大きな違いがあると思う。

「ゆらぐ科学のリアリティー」　黒崎　政男　（『朝日新聞』　2002 年 6 月 19 日付夕刊）

設問：主題（テーマ）を踏まえて、あなたが考える「科学」の問題点を、自由に題を設定して 200 字以内で作文せよ。

科学の限界　　１年男子

科学技術が発達してから人々はかなり多くの場面でその恩恵にあずかっている。交通や通信などはもちろんのこと、最近ではクローン技術の発達により生命にまで手を加えられるようになった。しかし近代以降急速に発展を遂げた科学はその代償に地球環境を捧げてしまった。もはや科学は万能ではない。科学だけでは解決できない問題がこの世界にはたくさんある。科学の限界を知り、改めていくことで新たなステップへと進むのである。

III　実践例の検証

本実践で注目すべきは、年間を通した取組として計画され、指導のコンセプトやポイントが学年でし

っかりと共有されている点と、生徒作品集「蒼穹」への掲載を目標化することで、作文活動が読み手を意識した良質な表現活動として機能している点にある。その取組のフレームはいたってシンプルで、計画が途中で頓挫するような危うさがない。そこには、散発的で一貫性に欠ける取組にはない「書く力」を向上させる土壌がある。

生徒アンケートによると、「作文」を行うことによる「書くこと」への意識の変化について、「高まった」とする生徒が３３％であったが、「書く力」を身に付ける上で「役に立った」「ある程度役に立った」とする生徒は合わせて８６％であった。これは、書く回数を年間で９回確保し、継続的に書く機会を与えることによって、文章を書く上での語彙力・構成力・要約力等の「書く上での実践的な能力の向上」を実感している生徒が多数いることを示している。

実践において工夫があった点は、以下のような問いの立て方にある。

①「筆者の考えを踏まえて」「主題（テーマ）を踏まえて」など、本文の確かな理解をもとにした作文を求めていること。
②「～とはどのようなものだと考えるか」「あなたが考える○○における問題点を」など、「自ら考える力」を求めていること。
③「自由に題を設定して」と、作文の内容を端的に要約化・象徴化する力を求めていること。

この問い立てによって、「読むこと」と「書くこと」を密接に関連させ、「他者」と「自己」を対照化しながら、自己の主張を論理的に組み立てていくという力が養われるようになっている。また、本文の読みを踏まえたり、標題を付けたりすることによって「読解力」「要約力」が求められることになる。この取組は、生徒のアンケート「３『作文』に取り組むことによる効果」において、７割の生徒が「考える力」がついてきたと回答し、次に「内容理解」「論理性への意識」の回答が多かったことに反映されている。

したがって、本実践による短作文の効果は「自ら『考える力』の育成」「書くことへの抵抗感の減少」「文章の論理構成への意識の向上」「文章の内容理解の深化」にある。それらを総合すると「『読むこと』と『書くこと』が結びついた論理的思考力・表現力の深化」とまとめることができる（図１参照）。生徒の作品例では、短作文の効果が確実に表れていると思われる。

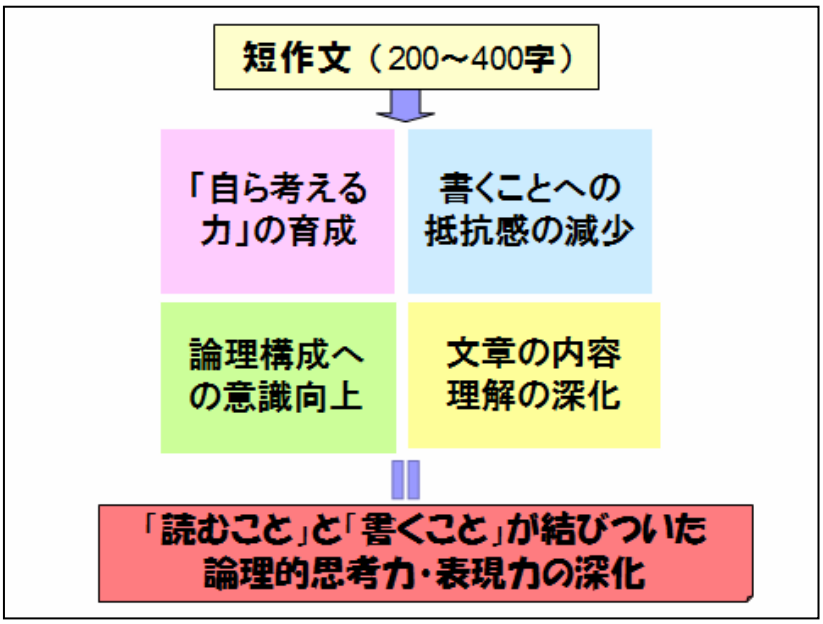

図1　短作文（200～400字）の効果

一方、松尾教諭が課題として挙げているのは、「事後指導と評価」である。回によっては生徒に回し読みや相互評価をさせるなどにより意欲の向上に一定の効果があったことは認めつつも、年間を通した「伝え合う」場のこまめな確保や個々の生徒に対する「書き方」の指導などの必要性を感じている。生徒の中にも「添削」を求める声は多い。

しかし、「添削」に時間をかけすぎると、教員の負担が大きく、返却のタイミングが遅れたりして思うような効果を上げることはできない。したがって、短作文の短評や指導に際しては、いかに返却を速

やかに行いかつ効果的な指導を行うかを考える必要がある。そのためには、継続性や連続性を前提とした取組の計画と生徒の学習活動と指導のスパイラル状のやり取りの設定が求められる。書く上での要素は様々あるが、その時につけたい力に見合った評価にポイントを絞り込むことが大切である。改善すべきポイントが明確であり、次回の作文でそのことを意識して生徒が取り組み、教員が再評価するといったサイクルが確立されると、「書くこと」の具体的な力が段階的につくのではないだろうか。その際は、コンポジション理論に基づいた「書き方」への指導を中心とする方が焦点を当てやすいと思われる。

他方、短評や評価は基本的に生徒の意欲を高めるためのものである。厳しい指摘が必要な場合もあるが、懸命に書いた態度への承認や内容への理解・共感などを示すことも大切である。特に短評における言葉づかいなどには十分に配慮したい。短評では肯定的な評価と課題を端的に述べ、文中では生徒とルールを確認したラインや符号を主に利用し、誤字もチェックのみで生徒自身に修正させるなどして合理化を図り、返却時間を短縮して、指導の連続性や継続性を生み出すような改善を図ることが望まれる。むろん場合によっては詳しい短評や添削が必要な場合もあり、生徒個々の状況に合わせた指導が基本である。また指導の方法は合理化されても、生徒を支援する心がこもっていなければならないことはいうまでもない。

生徒相互の作文の開き合いについても、時間をかけてよい場合と時間をかけないで済ませる場合の設定が必要だろう。ペアもしくは小グループで読み合い、意見を交換するならさほど時間はかからない。また、時間をかけてよい場合は、評価を相互に書いたりすると「書くこと」の発展になるし、グループでのディスカッションやディベートを設定すると「話すこと・聞くこと」への発展ともなる。そのような取組にはぜひ観点別評価の視点を入れておきたい。

平成２３年度の「調査研究」で実施した「『書くこと』の指導に関するアンケート」によると、中学校・高校ともに半数弱の教員が２００字程度の作文に継続的に取り組んでいる。その一つとして、長崎東高校の西川友絵教諭も、高校１年生で教科書単元ごとの短作文に取り組んでいる。１０回の実践を通した効果として、「小論文などの記述力が上がった」「『書くこと』の抵抗感がなくなった」「読む力が高まった」といった点を挙げている。また、事後処理については列ごとの回し読みと相互評価及び優れた作品の紹介はしているものの、添削は行っていないということであった。成果と課題については、先の長崎西高校のケースと同じ傾向であり、「短作文」の実践を行っている場合、多かれ少なかれ成果と課題は共通するものがあると考えられる。

Ⅳ　終わりに

短作文を実践する際は、「計画」と「評価・事後指導の改善」がポイントである。「書くこと」の学習活動と指導のサイクルを確立するためには、論理的な構成が可能でかつ短時間で事後処理が可能な「２００字作文」への取組をまず勧めたい。そこで培った「書くこと」の基本的な力をもとに長作文に取り組ませるというステップが必要であろう。また、藤原与一氏による「２００字限定作文」（「国語教育の技術と精神」新光閣書店）や志村道子氏による１０分間で「２００字作文」に取り組み、それを連続３回の授業で繰り返す方法（「改訂　高等学校　学習指導要領の展開　国語科編」馬淵和夫　大矢武師編　明治図書）など字数や時間を制限して生徒の集中力を最大限発揮させるような工夫も効果を上げることにつながる。それぞれが工夫しながら「書くこと」への取組がさらに活発化することを期待したい。